

発行人 立命館大学島根県校友会

会長 岡本 隆志 (昭56産社)

<http://alumni.ritsumeiji.jp/shimane/>

事務局 松江市御手船場町572-2

和田 裕之 (平5経営)

立命館島根



立命館大学校友の皆様こんにちは。
平素から島根県校友会の活動に対してご協力を頂き厚くお礼申し上げます。
島根県校友会では、毎年秋に総会を開催していますが、昨年度は立命館大学の三宅雅夫副学長・校友会の林幸雄副会長・学校法人立命館の村上吉胤担当課長にお越し頂き、およそ30人の参加で盛大に開催することができました。
講演会では、産業社会学部出身で前の邑南町長の石橋良治様に、「町全体が大きな家族」という演題でお話しして頂きました。石橋様は、旧石見町議会と島根県議会の議員を経て、合併後の初代邑南町長に就任され、5期20年にわたり特色ある町政で地域振興に尽力された方です。

ご挨拶

島根県校友会 会長
岡本 隆志 (昭和56年 産業社会)

私は県議会議員時代から存じ上げており、いつかお話を聞きたいと思っておりましたが、多忙な町長時代には実現しなかったため、ご退任されたタイミングで校友会総会での講演をお願いし、当日は遠路松江までお越し頂きました。

いまや各自自治体がアイデアを凝らしてユニークな取り組みを行っていますが、この日の石橋様の講演では、医療・福祉・教育など、住民が安心して暮らせる地域づくりに情熱をそそがれたことが紹介され、中山間地の首長として奮闘された姿を改めて知ることができました。

さて、昨年は初めての活動として、奥出雲町で開催された立命館大学ホッケー部「立命館ホリーズ」の公式戦の応援を行いました。

わが立命館大学のホッケー部は男女とも国内トップリーグに所属し、輝かしい成績を収めています。応援に訪れた試合は、日本リーグサムライD1リーグ、地元セルリオ島根との一戦で、立命館ホリーズには横田高校OBなど山陰出身者がまたセルリオ島根には立命館OBがそれぞれ複数所属しており、島根県に住む立命館卒業生としては、どちらのチームを応援するか悩ましいところでした。

ご存じの方も多いと思いますが、横田高校や鳥取県の八頭高校は高校ホッケー界では全国屈指の強豪で、両校から立命館に進み、卒業後セルリオ島根に入団した選手も多く、この日の試合は立命館ホッケー部のOB対決でもありました。



試合は立命館ホリーズが1点リードで迎えた第4Q終了まじかに、セルリオ島根が同点ゴールを決め、サッカーで言うPKにあたるシュートアウトで立命館が勝ち点を獲得しました。

今シーズンの島根での試合はすでに終了していますが、来年以降も島根で立命館ホリーズの試合があれば、皆様も応援に行かれてはいかがでしょうか。

ことしの総会は9月12日(土)に、松江市のサンラポーむらくもで開催します。この原稿を書いている段階ではまだ確定していませんが、講演会には初の試みとして、「未来人財育成基金」の助成で活動している現役学生を招き、プロジェクトの取り組みについて話してもらう計画です。「未来人財育成基金」は校友の浄財で運営される学生応援プロジェクトで、食や環境問題をはじめ、様々な社会課題に若さと情熱でチャレンジする活動を応援しています。試験前だけのわか勉強でかろうじて単位を取った身としては、学業以外にテーマを決めて仲間と力を合わせてプロジェクトに取り組む学生たちには頭が下がる思いで、その熱き思いを直接聞いてみたいと思っています。

校友会活動としては、おとしから中国四国ブロックの交流会が始まり、去年11月の山口市、ことし6月の米子市と持ち回りでブロック会議が開催され、校友会ネットワークが構築されています。各種活動への本部からの補助金も充実しており、皆さまとの絆を強めるための企画を立案して行き

たいと思っております。

最後になりましたが、校友会会員のみなさまの益々のご活躍とご健勝をお祈りし、相互の交流が一段と深まることを期待してご挨拶とさせていただきます。

令和8年6月

学生時代の大切な仲間たち

後藤 憲司 (平成5年産 社)

こんにちは。私は1993年産業社会学部卒業の後藤憲司と申します。

この度は島根県校友会さんからのご依頼でこの様な寄稿する機会を頂き光栄に感じています。ありがとうございます。

現在は山陰合同銀行の津田支店に勤務しております。長いもので銀行員としての在籍は30年を超えることとなりましたが、今振り返りますと様々な上司、同僚、部下に助けられて、あつという間に過ぎていったと感じております。

勤務地は主に山陰両県の各市町村の支店で仕事をさせてもらいましたが、地域としては倉吉と雲南市以外の山陰全ての市で仕事をすることができたと記憶しております。この経験は今でも私の大切な財産となっております。

学生時代は多分に漏れずアルバイトとサークル活動に明け暮れておりましたが、

特に4年間続けてきましたパチンコ屋さんでアルバイトは今でも鮮明に覚えています。

当時はまだバブル経済の名残があり景気は意外と悪くないと感じられ、バイト先では毎日食事をいただくことができました。加えて、年に数回社員旅行があり、相当豪華な旅行だったと記憶しております。(福利用生は本当に良かったです)

場所はあの有名な円町(西大路丸太町)で名前はKING。毎年の駅伝シーンで良く映像で見られる場所で、当時は有名なパチンコ屋さんでした。

対面には牛井の吉野家が存在しており、バイト帰りの遅い時間に使い走りをよく頼まれたものでした。

そして夜な夜な牛井を食べながら仲間と酒を酌み交わしていたよき思い出があります。

当時は携帯電話のない時代。どの様に連絡を取り合っていたのか今思えば不思議ですが、逆に携帯電話に支配されている現代より意外と工夫して楽しくやり取りしていたのでしょうか。その時の仲間は今でも連絡を取り合っており、今春には久しぶりに同窓会を計画しています。

卒業後、時は流れ皆仕事も円熟期を迎えておりますが、当時持っていたハングリーな気持ちをまた思い出して、これからの日々、また新鮮な気持ちで過ごしたいものです。

大学の業務をしながら感じること

前森田 博義 (平成7年法)

島根大学職員の前森田と申します。平成7年に法学部を卒業し、1年余りの就職浪人生活を経て、平成8年の国家公務員試験に合格したことからこの年10月に島根大学に採用され、国立大学職員として働くことになって今年で30年を迎えます。私は鳥取県米子市の出身で鳥取県西部校友会には参加していましたが、就職によって島根県にご縁ができたにも関わらずこれまで島根県校友会には参加していませんでした。昨年の島根県校友会総会に参加したことがきっかけで今回寄稿の機会をいただきました。どうか今後ともよろしく願います。

私は現在、出雲キャンパスの医学部学務課に勤務しており、医学部の学生業務を担当しています。日々カウンターで学生の対応をする度に自分自身の学生時代を思い出し、それが脳に再インプットされるためなのか学生時代の記憶はいまだに鮮明です。毎日のように講義、奨学金、国家試験、課外活動、各種のイベントなど学生生活を送る上で必要な情報を電子メールによる一斉配信や島根大学ホームページ内に開設されている学生向け掲示板への掲載により学生に周知し、学生は自宅に居ながらにしてパソコンやスマホでそれらの情報を確認することになります。1限目の講義が教員の何らかの事情で休講になる場合もあらかじめその情報が伝わるため、学生はそのことを

知らずに登校して無駄足を踏むことはありません。

私の学生時代とは隔世の感があります。私が大学に入学したのは平成2年のことでした。まだパソコンもスマホもなく、インターネットによる情報収集など考えられない時代です。登校してまず足を運ぶのは存心館1階の法学部掲示板でした。この掲示板で休講の情報、ゼミ担当教員からゼミ生への連絡、日本育英会の奨学金に関する連絡、法学部事務室から呼び出されている学生の一覧表の中に自分が含まれていないか等を順番に確認してから講義室に向かいました。これから出席しようとしていた講義が休講になるという掲示が出ていた場合は、同じ掲示板を覗き込んでいる同級生たちと顔を見合わせた後に一緒に喫茶店に行つてコーヒーを飲むか、地下に降りて生協書籍部で雑誌や本の立ち読みをするか、図書館か自習室に行つて真面目に勉強をするかのいずれかで次の講義までの時間をつぶしたものです。

当時は何かの情報を得るためにはまず外に出かけたり、人と会ったりしなければならぬ時代でした。自宅で各種の情報が入手できる現在から見れば大変不便な時代ということになるのですが、インターネットが一般的になる前はこれが当たり前で何の不便も感じませんでした。まだ電子メールが存在せず、手紙やはがきのやり取りは普通にありました。下宿にはマイクローカセット式の留守番電話機を取り付けており、外出から戻つてくるとテープを巻き戻

して留守中の録音メッセージを確認したものです。電話機を持たない学生も少なからずいて、彼らと連絡を取る場合は彼らの下宿の大家さんに電話をかけて呼び出してもらうこともありました。

立命館大学は関西だけではなく北海道から九州まで全国各地から学生が集まつており、彼らとの交流は楽しいものでした。下宿生同士で集まつて夜通し語り合ったり、一緒に河原町まで遊びに出かけたりしました。外国語クラスやゼミ、そして各種のサークル活動などを通じて出会つた友人たちから未知の人を紹介されて交流の輪が広がることも頻繁にありました。このようなことは高校まで経験したことがなく、大学は学ぶ場であるのと同時に人間関係を作る場でもあるのだと感じたものです。大学を卒業した後も学生時代に築いた人間関係は続いており、出張や旅行で遠出をする際はその地にいる学生時代の友人と連絡を取つて会うことがあります。ずつと会つていなくても再会すればあの頃のまま話が弾みます。友人だけではなく、親身に指導して下さつた先生方、学生生活をサポートして下さつた事務職員の方々など本当に多くの人との出会いがあつたおかげで恵まれた学生生活を送ることができました。

誰にとつても人生で一番いい時期である学生時代を京都という最高の地で過ごせたこと、そして立命館大学という全国の大学で過ごせたことを心から誇りに思っています。数ある大学の中から立命館大学を選択して入学したことが自分の人生で最良の

選択だったということをお願いながら今後母校、そして校友の皆さんとのご縁を大切にしていきたいと思います。



（平成7年3月 卒業式の日の私）

学生時代を振り返って

落合 美喜子（平成10年 文史）

平成10年に文学部史学科東洋史学専攻（当時）を卒業してから30年近くが経ちました。

東洋史は日本を除くアジア全域と北アフリカが主な研究範囲となりますが、わが立命館東洋史は京大・内藤湖南先生を祖とする京都学派（中国史分野）の流れをくみ、中国史を主としています。当時のクラスメイトには熱心な中国史愛好者が多く専攻系授業の難易度は高め。特段の志もなかった自分は授業についていくだけで精一杯でした。衣笠キャンパス・清心館三階の文学部書庫（途中、向かいの修学館地下へ移転）

で古書特有のスモーキーな空気に目や喉を痛めつつ史料や論文を読んで終わる一日。当時は嫌で仕方がなかったのに、今では懐かしく思えるのですから不思議なものです。遊ぶ気満々で母校の門をくぐつたものの、実際そこまでの余裕はなく、案外真面目な学生生活だったと言えるかもしれません。

そんな中、仕送りの足しにしていたアルバイトの一つに京都競馬場の場外警備員があります。なかなか珍しい経験のようで、少し振り返りつつご紹介します。

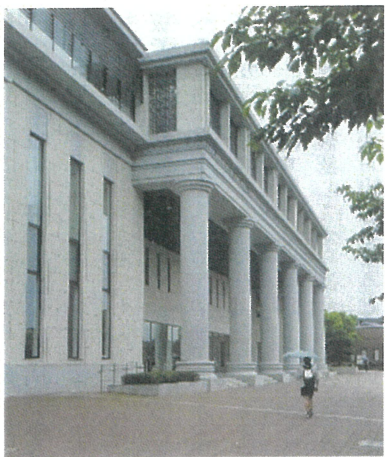
昭和末期のオグリキャップ人氣が過ぎて数年、ナリタブライアンなどの名馬が注目を集めていた頃です。「耳に赤鉛筆、片手に競馬新聞」のオジサンたちの怒号飛び交う昭和の競馬場は、前述のオグリ人氣を契機にイメージ刷新と環境改善が急速に進み、平成には若い世代や女性、家族連れも多く訪れるレジャーパークへと変わってきました。

開催日である週末は多くの来場者で賑わいますが、天皇賞や菊花賞などの大レース当日はその数が跳ね上がります。ある大レース当日、附属駐車場入口の料金場——高速道路料金所のようなブースの中で普通車一台一日2千円の駐車料を頂く仕事のことです。朝9時の開場からメインレース前までの約6時間、入場待ちの車が長蛇の列をなし全く途切れません。休憩も取れずひたすら対応を続けた結果、売上金の千円札が積み上がり30センチほどの高さになりました。少なくとも2百万円はある札束の塔は、一介の貧乏学生には衝撃的な光景で、その

記憶は今も鮮明に残っています。

その後競馬に興味を持ち、週末は競馬に専念すべくアルバイトは辞め、一ファンとして競馬場に通うようになりました。京阪電車で少し南に下れば白熱のレースを直に楽しめるという恵まれた環境にあったと思います。競馬への造詣が深い友人と喧々譁々の予想合戦、そしてその答え合わせとしてのレース観戦で一喜一憂したのも楽しい思い出です。

今は令和。当時応援していた馬の孫や曾孫が活躍する時代となり、過ぎた時間の長さを感じます。振り返れば、静かな書庫と熱気渦巻く競馬場、そのどちらもがそれまでの自分の世界を大きく広げてくれたかけがえのない空間でした。大学4年間の思い出と得られた経験は人生における大切な財産だと思っています。



人生の分岐点〜衣笠キャンパス

中谷 雅晴（平成11年文哲）

1995年4月1日。忘れもしない、今日の人生がスタートしたまさにその日。衣笠キャンパスで行われた入学式に慣れないスーツで出かけ、帰り際に当時の図書館近辺に設けられていた「新入生 歓迎ブース」に誘い込まれた。そこが私の『舞台』の幕開けだった。

4回生の女性の先輩が「ちよつと寄っていかうか？」と、現代ならコンプライアンス違反が色濃いセリフで強引に左腕を引っ張り、座らされた長机の対面には3人の先輩方が。聞けば「能楽部」だという。お面かけて、和服着てる、アレだ。ちょうど入学する5年ほど前に『天河伝説殺人事件』という浅見光彦シリーズがヒットしたこともあり、中森明菜ファンだった私はその時点で片足が鬼に掛かっていた。熱っぽく京都での4年間の過ごし方を説諭され、キャンパスライフの送り方がこの時点で垣間見えた。和服を着ていた先輩はいなかったように思うが、今にして思えば、あまり洗練されていない集団だったように記憶している。

きぬかけの道に隣接する「学生会館」なる建物の最上階にエレベーターで上がり、BOXなる部屋に連れて行かれた。そこには三間四方の板間が備えられ、壁には松の絵。その反対側に10畳程度の畳も敷かれていた。

「実演を見せますね。『仕舞』と言います。」

先程まで屈託ない表情で雑談を交わしていた先輩が、舞台の向こう側に立ち、シテ謡を一節張り上げた際に世界が変わった。空気が、ヒリついたのだ。まるで怒気をはらむような迫力。聞いたこともないような大きくて太い声。ここでは一瞬で別人になれると気がついた瞬間、私は門をくぐった。

幼稚園のころ、発表会の石見神楽「大蛇」では蛇胴を使わせてもらえず、風呂敷で代用させられた悔しい思い出。神楽社中に入ろうにも、バンカラな男性連中に囲まれる恐怖ですくんだ。でも大学生になった今、能ならば自分に出来そうな気がする。鬼や天女にも変身できそうな気がする！これが自分の進む道だとは思えない！！

この壮大な錯覚に浮かされ、以来四半世紀を超えて能の民である。普段は紋付袴姿



で「仕舞」を舞うのが通常だが、学生時代と能楽部80周年記念大会で2度ほどフルスベックの能の主役を勤めた。現在は、浜田市内で4人ほどを相手に謡のお稽古をつけているほか、月に一度福山市の師匠稽古場に足を運んでいる。なかなか流行らないジャンルの芸能だけれども、実演を通して魅力を理解してもらえるときは快感が、今なお続く活動の原動力となっている。

年会費納付のお願い

島根県校友会存続の為、何卒ご協力の程お願い申し上げます。

同封の「払込取扱票」にて、または、左記振込先に、2千円納付くださいますようお願い申し上げます。

山陰合同銀行

本店営業部001
普通 4500560

立命館大学島根県校友会

ゆうちょ銀行（同封の払込取扱票を使用されない場合）

店番149 店名一四九店
当座0021135

立命館大学島根県校友会

出費多端の折ではございますが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

